◎冷たき笑み

岩代須賀川町　服部　貞子

市人の冷たき笑みに、我はまたこの馬の背の米を賣らで歸りぬ。

富に媚び、貧にほこれる其の顏に、うかべる冷たき笑みよ、我が此散髪の亂れ可愛しと嘲笑ふか。さはれ聞け、北支那の原に銃とりたゝす我背の君が、君の御爲め、御國の爲めに、盡す御身につゝがなかれと、祈る心に斷ちきりて、神に捧げまつりし我黒髪なるを、身につけしつゞれの布を、あまりに薄しと、眉うちひそむるか、さはれこは、み情け深き姑君が、己れ稻こく其傍に、行燈の灯かきたてゝ、老の手もとの覺束なくも、その一針一針に、眞心こめて給はりし、いともあたゝかきものなるを、紙より薄き世の人心のなどて味ひ偉るべきかは。

馬の背につけしこの二俵の新米よ、背の君が留守を、女の纖手（せんしゅ）に心細くも辛うじて得たる、尊き、尊き、寶なるを。價高し、の一言に見向きもせぬ市人。さは人の汗の賜をひそかに盜めるさもしき人の手より買ひぬ。我が米はさる汚はしきものにはあらぬを。

市人よ、笑はゞ笑へ。我は再び市には出でじ。榮華の夢を貪る人々にはまみえじ。

たゞ老いませる姑につかへむ。愛らしの馬を勞はらむ。かくてやがてかへりまさむ背の君を、われは待たむ

【入力者注】原文には、傍点などが付されていますが、煩雑を避けるために除きました。
ルビは入力者の判断で付しました。

底本・初出：「女子文壇」第貳巻第六號
テキスト入力：小林　徹
公開：令和三年二月二十八日
リンク：水野仙子ホームページ